

「亡くした命が宿るとき」

K・M

母が亡くなり十一年が、そして父が亡くなり二年が過ぎました。両親はそれぞれ二年半ほどの闘病生活があり、その間に当人はもちろんのこと、家族である私自身も様々な葛藤や苦悩の日々が続きました。当時のことは、両親が亡くなった後から、すんなりとは思いつけませんでした。私の心が、つらい思いを甦らせまいと記憶を封印しているのかもしれませんが。けれども今、辛い作業ではありますが記憶をたどり、ここに記したいと思います。それは、自分の中にこもった重い記憶も、外に放つことで徐々に軽くなっていくことを知っているから、そして私と同じ思いを抱えていらっしゃる方が、前を向いて歩いていかれるきっかけになることが出来ればと願うからです。

十一年前に母が亡くなった時、私は妊娠五か月でした。病気や薬の副作用と闘った末に無念にも最期を迎えた母と、真っ白な状態で生まれてくる我が子……私は二つの命の間で思い悩みました。いつか命に終わりがくることが分かっているのに、

生まれてくる意味があるのか、と。けれども、母が亡くなり自暴自棄になっていたかもしれない時期を、子どもがお腹にいてくれたおかげで自らの心体を守っていられていると気付いた時に、母は時期を見定めて逝き、子どもは時期を見定めて生まれてきた、と思えるようになりました。始まる命にも終わる命にも、全てに意味がある——そう確かに感じられるようになったのです。

それでもやはり、頭の中にはずっと雨雲がかかったままです。おそらくそれは、母を失った悲しさや寂しさ、あの時こうしてあげればよかったと戻らない過去への後悔、私の最期も明日やってきてもおかしくないという不安感から来たものだったのでしょう。嬉しいことがあれば「母に話せば喜んでくれただろう」と思ひ、嫌なことがあれば「母だったらどんな言葉をかけてくれただろう」と思ひ、何があっても結局は「母がいないこと」を嘆いていたように思います。ずっと心に雲がかかったまま、慌ただしく毎日が流れていきました。

七年が過ぎた頃、ある朝洗濯物を干し終えた私は、秋晴れの青い空を見上げました。その高くまで透き通った空の青さは、今でも目の中に浮かんできます。心の底から清々しさを感じ、体の隅々にまで澄みきった空気が満たされていく——数年ぶりに味わう爽快感でした。「トンネルから抜け出たかもしれない」そう思えた時に初